

〈家の物語〉としてみる『今とりかへばや』

——「世づかぬ」異性装

伊 達 舞

一 はじめに

『今とりかへばや』は平安時代末期、原作となった『とりかへばや』からリメイクされた異性装のモチーフを持つ物語である。⁽¹⁾その内容は左大臣家(冒頭時は権大納言) 兄妹の「とりかへ」に端を発する一種珍奇なストーリーであり、男装の女君(女中納言・今尚侍・中宮)・女装の男君(男尚侍・今大将・関白左大臣)を中心として、女中納言と結婚することになった四の君や、四の君の密通相手であり且つ女中納言自身とも男女の関係となる宰相中将、男尚侍と深い関係となる女春宮、左大臣家兄妹の相談役を担う吉野宮とその姫君二人などが、兄妹の男女「とりかへ」に巻き込まれながらも最終的に大団円を迎えるサクセス・ストーリーである。

男女性の逆転・異性装というモチーフや、それ故に回避することの出来ない男女性の混淆した性愛表現があることから、古くは倒錯的・退廃的物語と捉えられ長い間正統な評価をされずにきたが、鈴木弘道氏が「愛情の種々相」を描いた物語として再評価して以降、⁽²⁾今井源衛氏、桑原博史氏らによって、『今とりかへばや』に見られる性愛表現は退廃的・変態的なものではなく、ごく健康的な恋愛描

写であると思直されるに至った。⁽⁵⁾以来『今とりかへばや』研究は文学的方面のみならず、多方面の分野から活発に行われている。中でも作品のコアとなる男女の「とりかへ」・異性装に関しては、歴史学をはじめ文化人類学や服飾史の分野を中心に広く取り上げられ、作品成立の背景となる上流貴族男性の化粧や男色の流行、稚児愛、白拍子等異性装の芸能者の登場といった院政期特有の風潮と切り離して論じることが出来ない。また昨今では心理学やジェンダー研究の立場からも注目されている。河合隼雄氏は『今とりかへばや』の物語を起点に、古今東西の物語を挙げつつ、男女の二分法的あり方からその境界としての男女の交換・両性具有性の存在、美や愛の捉えられ方へと問題を発展させており、また木村朗子氏は、「とりかへ」により表層のジェンダーと生まれ持ったセックスの性差が錯誤する兄妹の存在によって、男女の二分法だけでは解ききれなくなった性と宮廷権力の関係について論じている。⁽⁶⁾

無論、平安末期の物語を現代社会の目線から語ることには慎重でなければならぬ。例えば『今とりかへばや』で語られる同性同士の恋愛関係について、田中貴子氏が稚児の性の位置づけと同様ある種の越境した性として扱われているように、歴史的背景やそれに

より培われた当時の価値観に基づく『今とりかへばや』の異性装や同性間の関係を、即座に現代の性同一性障害や同性愛、バイ・セクシユアルと同一次元に考えることは出来ない。

異性を装うということは古来より現代に至るまでに見られる文化的事象であると同時に、我々の興味の対象でもあった。異性装はごく身近に存在を認められながら、常にマイノリティに属するものとして認識され語られてきたのである。『今とりかへばや』の男女「とりかへ」・異性装のモチーフにしても、その根底に性の転換へのごく単純な興味と欲求があることは否定できない。しかしながらこの男女の「とりかへ」は、物語が発した時点からストーリーの中心にして重大な位置を占めるようになり、それが『今とりかへばや』という物語を形作ることになった。一旦物語として成立した以上、重要となるのは「今とりかへばや」がどのように異性装を語っているかではなく、異性装が物語の中で何を語っているかなのではないだろうか。

そこで本稿では、数ある『今とりかへばや』の「とりかへ」問題のうち主に「異性を装う」ということに焦点を絞り、それまでに行われてきた異性装の言説の中で位置づけ、他作品と比較から『今とりかへばや』が語る異性装の役割に迫っていききたい。

二 異性装の言説

①力を借りる／隠すための異性装

異性装の言説の系譜に関しては、築田英隆氏が記紀神話から近現代の小説・漫画・舞台芸術に至るまで総括的に論じておられ、その文学史上の起源は記紀神話にまで遡ることが出来るという。異性装

のうち女による男性装の最初の言説は高天原に現れた建速須佐之男命を迎える天照大御神の神話で、武装として語られた。武装に際して、天照はまず「即ち御髪を解き、御みづらを纏きて」と髪型を男性仕様に変えており、男性として武装した天照の気迫は「いつの男と建ぶ」、すなわち猛々しい男ぶりであったとされる。男による女性装の言説も同じく記紀神話の内に見出せる。景行天皇から西の熊曾退治を命じられた小碓命（倭建之命）は、出立前に姉・倭比売命から御衣・御裳といった女性の衣装を貰って退治に向かった。そして熊曾のもとへ到着すると、祝宴の日を待ち、倭比売命の衣装を身につけ女性に扮して祝宴へと潜り込み、見事に熊曾兄弟を討ち果たすのである。

佐伯順子氏は文化人類学の視点から、この熊曾退治における倭建之命の女性装の効果として、周囲の警戒心を解くこと、女性のエロスの要素・性的魅力を獲得し男性を籠絡することの二点を挙げられる。¹⁰⁰とすれば天照の男性装には、戦に備えて「男性」に連想される猛々しさや暴力性を獲得する効果があったものと考えられる。つまりどちらにも、「女性」≡非暴力性、「男性」≡暴力性という結びつきを前提に、これを逆転させるものとして異性装が存在していることになる。

この点に、男性装と女性装の差が存在しよう。前者が異性装により「男性」に伴う力を付加するものであるのに対し、後者のそれは女性的魅力を獲得することもさりながら、「男性」の持つ力を隠匿することにより相手を油断させることに重きが置かれている。そのため、女による男性装の場合には外見のみが男性化するに留まっておき、周囲からは依然女性として認識されている一方、男による女

性装の場合は外見の変化のみならず、その性質も「女性」を装い、周囲もしくは標的とする人物に本物の女と思わせる必要が生じているのである。しかしこれは逆に言えば、この時代の男性装には『今とるかへばや』のように正体を暴かれるという危険は存在していなかったということでもある。

このような性質・効果を持つ異性装の言説は記紀神話以降一旦姿を潜め、中世、軍記物語の登場とともに、男の武士に交じって最後まで戦った女傑・巴御前や、『義経記』その美男振りが楊貴妃や李夫人といった美女と並べられ女性装のエピソードまで見られる源義経などの物語へつ受け継がれていくこととなる。

②異性に紛う可能性の出現

では『今とるかへばや』のように外見の性と周囲から認識される性が一致し、それ故に露顕の危険も孕む異性装はどこから生じたのか。平安時代に語られる物語の中にそのヒントを探っていきたい。

上代にあつて「男性」は、主に猛々しさや暴力性に結びつくものとして存在していた。しかし時代が下るにつれ、特に上流貴族社会における「男性」の理想像は、より優美で典雅なものへと移り変わってゆく。平安貴族社会における「男性」と「女性」の理想的な姿について武田佐知子氏は、平安時代の物語に男性の涙する姿が多く見られること、「なまめかし」の形容が男女両方に用いられることから、「男性の美意識、行動様式の理想像や価値観が、女性のそれときわめて近接していた」ことを指摘、また『源氏物語』の光源氏をはじめ、藤壺との密通関係のもとに生まれた冷泉帝、葵上との間の夕霧といった光源氏の血を引く人物や紫の上父・兵部卿宮、『今とるかへばや』の女中納言などの美しさを表現するのに女にし

て、見てみたい、という言い方がされていること、それに対して女の美しさを男にして見てみたいとする表現は無いことを挙げられ、「男女の理想像はボーダーレスであり、しかも女性の魅力に近似したかたちで最高の男性の魅力が評価された」としている。「男性」と「女性」の理想的なあり方に重なり合う部分が多くなり、両者が密接なものとして存在するようになったことで、男と女との間では、異性装とは別に、紛うものとしての互換性が浮かび上がるようになったのである。よく例に引かれる『源氏物語』帚木巻、雨夜の品定めの場合を挙げてみよう。

白き御衣などものなよかなるに、直衣ばかりをしどけなく着
なしたまひて、紐などもうち捨てて添い臥したまへる御灯影い
とめでたく、女にてみたまつらまほし

この時代、「男性」と「女性」の衣裳は、上着を脱いでしまえば似通った形状をしていたことも要因となり、類い希なる美を有した光源氏が衣裳を着崩した姿は、女性美に通ずる点が多分にあった。そのような源氏の姿には容易に「女性」が連想させられたことだろう、自然と「女にてみたまつらまほし」という欲求が生じてくる。

このような「男性」と「女性」の互換性は『今とるかへばや』にも見られる。帝や宰相中将は中納言（男）の女性と共通した魅力に引かれてまだ見ぬ妹の尚侍（女）の美しさを想い、その尚侍（女）を得られない煩悶に中納言（男）へと再び意識を戻すことになる。もつとも『今とるかへばや』の場合は、男と思われている中納言は実は女であり、女と思われている尚侍は実は男であるので、帝や宰

相は実際に男に女と共通する美を見出しているわけではないのだが、ここでは男二人が中納言を「男性」と見、姿を見ることのない尚侍を「女性」と思い込んでいる点が重要となる。この二重のねじれと男女の錯覚は、真に理想的な「男性」は「女性」に紛うものであることの、まさに実践例であると言えよう。

このように「男性」と「女性」の理想的なありようが近接していたことが、後に『とりかへばや』『今とりかへばや』『有明の別れ』のような男女の「とりかへ」による異性装の物語を生み出す土壌となつていたのであるが、一時的に異性と見紛つたり外見だけ異性を装ふことと、これら異性装のモチーフを持つ物語のように恒常的に周囲から異性と思ひ込み続けられるような異性装との間には、依然として距離がある。後述のように、周囲を欺く異性装にそれなりの説得力を持たせるための根拠が、〈個人〉としての特異な性質と、神や仏あるいは天狗など人間の能力を超越した力であった。

③ 〈個人〉の性質による異性装

〈個人〉の性質に異性装の根拠を求める例の兆候は、既に『堤中納言物語』の内の「虫めづる姫君」に見られているものと考えられる。

按察使の大納言家の姫は、「人はすべて、つくろふところあるはわるし」という独自の理論を持つており、数々の世間とは違う点を見せている。まず装いに関しては、

頭へ衣着あげて、髪も、さばかりは清げにはあれど、けづりつくろはねばにや、しぶげに見ゆるを、眉いと黒く、はなばなとあざやかに、涼しげに見えたり。口つきも愛敬づきて、清げな

れど、齒黒めつけねば、いと世づかず

と、引眉やお齒黒といった化粧をしない。また衣裳も、「練色の、綾の桂ひとかさね、はたおりめの小桂ひとかさね、白き袴を好みて着たまへり」と、頓着しない様子である。この練色は、『能因枕草子』に「衣の萎えたるは、いづれもいづれもきたなげなる中に、練色の衣こそきたなけれ」とあり、また袴も、若い女性は紅色を用いるのが普通であった。この時点で姫君のあり方は、当時の女性としての装いをはつきり拒否するものであり、少なくとも女性装を放棄していると言えるのではないだろうか。更に、引眉、お齒黒をしないという女性装の放棄は、転じて黒々とした眉に白い齒＝男性装とも捉えることが可能である。白い袴というのも通常男性が用いるものであり、完全な異性装には至らないものの、結果的に虫めづる姫君は半分は「女性」、半分は「男性」の装いをしていられるのである。

この男女相半ばするあり方は、装いだけでなく、姫君の挙動即ち内面にも見られる。男の童に蟬螂や蝸牛など故事のある虫を集めさせ、これらに関連する詩や歌を歌わせている中で、「われも声をうちあげて、「かたつぶりのお、つの、あらそふや、なぞ」といふことを、うち誦じたまふ」と、「男性」のような振る舞いに及んでいる。また鳥毛虫が木に多く集まっていると聞くと、一度は自分の元へ持つてこさせようとしたものの、男の童に「ただこことも、御覧ぜよ」と言われると「あららかに踏み出づ」様子も、到底姫君の行動とは思われないものである。ただし、例えば「さすがに、親たちにもさし向かひたまはず、「鬼と女とは、人に見えぬぞよき」と

案じたまへる」など、軽々しく顔を人目に晒さないところは至って普通の姫君であり、右馬佐たちの垣間見を知った際には、「立ち走り、烏毛虫は袖に拾い入れて、走り入り」姿を隠す分別は持ち合わせている。その行動においても姫君は「男性」と「女性」双方の特徴を有しており、かつまたどちらにとっても完全ではないものとして描かれている。

因みに、「虫めづる姫君」には「あやしき女どもの姿を作り」垣間見に出掛ける二人の男の姿も描かれている。しかし垣間見に気づいた男の童は二人を「清げなる男の、さすがに姿つきあやしげなる」と見ており、この女性装はストーリー展開上に何の必要性も感じられない。それならば、なぜ敢えてここに女性装の男性が配置されているのか。これは推察の域を出ないのだが、おそらくこの女性装は最初から「女性装をした男性」として描かれており、姫君の不完全な異性装の対に位置されるものとして配されたのではないだろうか。少なくとも「虫めづる姫君」には男に女性装をさせるといふ異性装の発想はあったのであり、そのことを踏まえて姫君のあり方を考えるに、やはり「虫めづる姫君」は置き換わり得る男女の可能性を示唆する物語としての一面を有しているものと考ええる。

ところで、この「虫めづる姫君」の大変個性的な性質は「世づかず」という言葉で言い表されている点に着目したい。『堤中納言物語』に収められる物語全編を通し「世づく」の動詞が用いられるのは、この姫君を表す「世づかず」一箇所のみであり、姫君の特異な性質を表すものとして特別に用いられていることがわかる。

「世づかぬ」姫といえは、それまでは『落窪物語』の落窪君であり、『源氏物語』の葵上・若紫・末摘花・浮舟であった。または『源氏

物語』の薫や『狭衣物語』の狭衣大将といった色事に対して消極的な公達にも「世づかぬ」等「世づか+（未然形）」の表現が用いられた。時代が下ると『夜の寝覚』や『浜松中納言物語』にも同表現が見られるようになるが、この用例が圧倒的に多く見られたのが『今とりかへばや』である。『今とりかへばや』において「世づく」の活用語は三十六例見られるが、そのうち三十五例が「世づか+（未）」の形で用いられている。¹³これは同時代頃に成立したと考えられる『狭衣物語』四例中三例、『夜の寝覚』六例中二例、『浜松中納言物語』八例中七例に比較して圧倒的に多く、『源氏物語』四十九中三十例と比べてさえ、その数はかなり多いと言えよう。その内訳は、左大臣家兄妹両方を示す場合が三例、女君単独に用いる例が二十五例、男君単独に用いる場合が二例、その他が五例であり、その殆どが左大臣家兄妹、特に男性装の女君に集中して用いられている。そして左大臣家兄妹に「世づか+（未）」の語が用いられた場合、三十例中二十七例とその殆どが「虫めづる姫君」のように、幼い頃の性格により男女「とりかへ」て元服・裳着を迎えてしまったという世間とはかけ離れた身のあり方を示している。

これに対して、『今とりかへばや』と同じく女性による男性装のモチーフを持つ『有明の別れ』での「世づか+（未）」の用例二例と少なく、その差は歴然としている。そもそも「世づく」から活用される語全てを合わせても五例見られるのみであり、この「世づか+（未）」の用法が『今とりかへばや』の男女「とりかへ」と異性装に対する姿勢を特徴付けている。そしてそれはおそらく世間一般の姫君と違って変わった「虫めづる姫君」の〈個人〉の世づかなさと共通する認識であったに違いない。

三、天狗の業による異性装、神のお告げによる異性装

（『今とりかへばや』と『有明の別れ』）

どちらにも女による男性装の物語を描きながら『今とりかへばや』と『有明の別れ』の異性装に対する姿勢にここまで差があるのは、両作品の、異性装に至った理由の違いが関係するだろう。先にも述べたように、この二作品のように一時的でなく且つ内実を伴った異性装の物語では、その根拠や理由・原因として、〈個人〉としての性質の他にも人間能力を超越した力が示されている。

『今とりかへばや』の左大臣家兄妹の間に「とりかへ」が起こり、男性装の女君と女性装の男君という二つの異性装が成立するに至った経緯を、物語の進行に添って見ていこう。男君は「恥づかし」と思う心が強く、絵を描くことや雛遊び、貝覆いなどばかりする性格で、母親や乳母、女童などにだけ対面するような有様であった。一方の女君は、外に出て年若い君達や男の童などと鞠や小弓で遊び、人前でも物怖じせずに漢詩を作ったり笛を吹いたりと活動的であったため、左大臣の邸宅に参上していた殿上人や上達部などがこの兄妹の性別を、本来とは逆に思い込んでしまう。父権大納言（後の左大臣）は、その後もますます姫君として素晴らしく育っていく男君と、やはりますます立派な公達として育っていく女君に悩まされつつも、それぞれの素晴らしさについてはやはり誇らしく期待する心があったために、帝の要請を受諾して、女君を男君、男君を女君と偽ったまま元服・裳着を執り行い、それぞれ出仕させてしまうのである。出仕後、さすがに普通とは違った「世づかぬ」我が身を嘆き、異性装の秘密が人に知られる所となるのを何よりも恐れた女君は、

世を厭い、唐婦りの出家者である吉野宮を尋ねる。この時女君は宮から「つひには思ひのごと上を極めたまふべき契り、いと高くものしたまふめり」と予言を受けているが、それは漠然としたものであり、異性装にて、「男性」として過ごすようになってしまった理由とは結びつかない。結局、この兄妹「とりかへ」が生じた理由が明かされるのは女君の異性装が宰相中将によって暴かれ、身ごもったことにより女姿に戻って宇治に身を隠した後のことになる。自ら異性装を解除し男姿に戻った男君の搜索の成果によって、兄妹の再「とりかへ」の算段がついた頃、女君の失踪のショックで臥せっていた父左大臣の夢に尊げな僧が現れ、兄妹「とりかへ」の原因が天狗の業にあったこと、それが今は解消し、兄妹はその性別の通りに戻り繁栄することを告げる。

かくな思し嘆きそ。この御ことどもは、いとたひらかに、明けん朝にその案内聞きたまひてん。昔の世よりさるべき違ひ目のありし報いに、天狗の、男は女となし女をば男のやうになし、御心に絶えず嘆かせつるなり。その天狗も業尽きて、仏道にここの年を経て多くの御祈りどものしるしに、皆こと直りて、男は男に女は女に皆なりたまひて、思ひのごと栄えたまはんとするに、かく思し惑うもいささかのものの報いなり

これによつて父左大臣の、そして左大臣家兄妹の「世づかぬ」嘆きは夢告げという確かな証拠を得て終結を迎え、男君は関白左大臣に、女君は帝の目にとまり中宮になるという展望が示されるが、この時には既に兄妹ともに本来の性装へと戻っているものであり、実際異性

装であった期間中、『今とりかへばや』の兄妹、とくに物語前半にスポットライトを浴びる女君は、理由のわからない異性装とその発端となった幼き日からの「世づかぬ」我が身をただ嘆くことしか出来ずにいたことになる。

一方の『有明の別れ』では、確かに男性装にて右大将の地位にある女君（以下、『今とりかへばや』の女君と区別するため女大将と呼称）も、「人知れぬ御心は、世とともに世づかぬ身のもてなしのみ、『いかにしてしことぞ』と思し悩まれて」とあるが、その直後には「『見し夢を、いかで思ひ合はする世もがな』と、下の心の至らぬ限なさのみぞまさりゆく」とあり、「世づかぬ身」が、かつて見た夢に由来するものであることが明かされ、以下その夢の内容が綴られる。

大臣の、大人び給ふまで、男君生まれ給はで、継ぎおはしますまじき世を、かしこき道にも考へ奉りけるを、いみじく思し歎きしあまり、様様の御祈をし給ひしに、この君ばかりが身籠もり給ひて、神の御しるべし告げ給ふやうありければ、かく思ひの外なる御さまに見なし聞え給ひてしなるべし

女大將は跡継ぎの生まれぬ左大臣家の「様様の御祈」の末に授かった申し子であり、「神の御しるべし」によって男性として育てられたことが物語のはじめにはっきりと示されている。『今とりかへばや』とは違い『有明の別れ』における異性装は、夢に現れた神による啓示という正当性をあらかじめ与えられた意図的・策略的なものであり、それは当時の感覚としては、神により将来が保証された

もののなのであった。女大將自身そのことを自覚しているからこそ、「世づかぬ身」であつてもいつか「思ひ合はする世」が到来することを信じているのであり、故に自らの異性装を「世づかぬ」ものと嘆くことはほとんどないのである。

また、この天狗の業と神のしるしとの違いは、異性装を解除する際の重要な要素となった髪の問題にも反映される。両作品の女君も、男性装から本来の姿に戻る際問題となった髪の毛の長さであるが、『今とりかへばや』では吉野宮から貰った「夜に三寸髪かならず生ふ」唐の秘薬によって長さを取り戻しているのに対し、『有明の別れ』では「神のしるし」によって尋常ならざる早さで伸びているのである。

『有明の別れ』は、異性装も神のしるしに因るものなら女性の姿に戻るときにも神の力が働いている。それぞれの女君は当代一の理想的男性として時めきながらも、片や行く末のわからない緊迫の中におり、片や過程はわからないものの最終的な到達地点としての繁栄を約束された中にある。この両者による異性装の現状の捉え方が全く異なっているのはむしろ当然のことであろう。『今とりかへばや』からの影響がとみに指摘される『有明の別れ』であるが、この神の導きにより異性に姿を変えろという逸脱した状態を経てすぐに帝と結ばれ、中宮・女院へとなる物語のあり方はむしろ、後世の『鉢かづき』『うばかは』等に見られる異形への「変身」による「同じ女性による男性装というモチーフにはじまり中宮になるという最終地点を共有している」と、『今とりかへばや』『有明の別れ』の焦点は異なった点に定められているように思われる。

四 〈家の物語〉としての異性装

以上のような違いにより、『今とりかへばや』『有明の別れ』は同じような状況に直面しながらも、異性装の女君の対応は微妙に異なる。例えば、両作品ともに男性装の女君は自分と同性である女を妻に迎え、その妻に密通事件が生じ子が誕生するのだが、この出来事に対して『今とりかへばや』においては、自らが「世づかぬ」身であることによる負い目と、それを世間に知られることへの恐れが前面に押し出されているが、『有明の別れ』においては「世づかぬ」嘆きの薄い分、より積極的な態度が目立つ。

そもそも『今とりかへばや』の女君と四の君の結婚は父により取り決められたことであり、求婚の手紙も父に言われるまま「何事も思し分かず」に書くという、なんとも不安げなものであった。次第に「世づかぬ」身に苦悩するようになった女君は密通に気づいても、四の君に対しては「わが心のうちはいたく心動きあながちにものを苦しう思ふべきゆゑもなきに」と一歩退いた立ち位置から接しており、姫君が誕生しても「すべてわが身の世づかぬ怠りのみこそ、思ふにも言ふにも尽きぬ心地すれ」と自分の非を語っている。それよりも、女君が意識していたのは世間の目特に男仲間たちの目であった。密通によって四の君が処女であったこと、即ち自分たち夫婦が見せかけの関係であることを知る人が出来てしまったことに女君は動揺を隠せない。「人はをこがましとも世づかずともさまざま目を立てて思ふらんこそいみじう恥づかしけれ」と、世間一般のようでない有様を人に知られたことで、侮られ、笑い者となっているだろうことを憂慮する。また宰相中将の面立ちを受け継いだ我が子を見

て密通相手が昔なじみの宰相中将だと察すると、「疎き人にだにあらで、昔より隔つることなくかたみにまつはれたる人にしも、いかにあやしともをこがましとも思ふらん」と、幼い頃から特に親しかった人物に「をこがまし」く思われることを恥じ、嘆くのである。これに対し『有明の別れ』においては、まず「世づかぬ」身がそもそも〈家〉の後継者の獲得、ひいては〈家〉の繁栄のためにあった。女大將は隠れ蓑を用いての日々の夜歩きの中で知った対の上が、義父との間の子を身籠りうち嘆く姿にひどく同情し、また彼女自身の素晴らしさにも惹かれ、妻として左大臣邸に連れてくる。父左大臣も娘のこの行動に対し「世とともに思ひつることはこれなりけり」と、御胸あく心地して、いとしき御祈りをさせ給ふ」と全面的に歓迎した。対の上はこの後男児を出産し、結果として左大臣家は悲願の世継ぎを得ることとなる。また、対の上に色好みの三位中将が通い、妊娠が発覚した際にも、

右大將の、御心ながらいとかたはらいたけれど、かかることなど宮に忍びて、『げに心づきなくおこがましきことなれど、さりやいかげせん。宵宵』ことの関守も許しさくこそは。いとど末々広ごり給はんはいと思ふやうなり」と、思し許すかたしあれば、いみじくもてはやし給ふ

と、左大臣家の繁栄に繋がる子の誕生は意に適ったものと受け止められており、物語の視点は〈個人〉の苦悩よりも〈家〉の繁栄に向けられている。

では、『今とりかへばや』の異性装は〈個人〉に、『有明の別れ』

の異性装は〈家〉に繋がるものとして描かれていると言えるのか。結論から先に言えば、一概にそうとは言えないものと考ええる。

一見〈個人〉に重きが置かれているように見える『今とりかへばや』であるが、表向き左大臣家の中納言の子とされている右大臣家四の君と宰相中将の間に生まれた姫君が、物語終盤には左大臣家女君を母に持つ帝に入内し、藤壺女御となっていることに着目したい。この時春宮には同じく女君に生まれた二の宮が立坊しており、左大臣家男君と麗景殿の女との間に生まれた姫君が入内していることから、語られることのなかった次の世代において次の春宮となるのはこのどちらかの間に生まれた男皇子であろうと想像されるが、おそらく年長であり、且つ表向きとはいえ関白左大臣（左大臣家男君）を父に、太政大臣（元右大臣）の姫を母に持つ姫君から生まれた皇子が立坊したと考えるのが筋ではないだろうか。とすれば、宰相中将との密通の末に生まれた姫君は紆余曲折を経て結果的に、かつて右大臣が四の君と女中納言の間に子どもが生まれたら「わが家の光にこそはあらめ」と期待していた通り「〈家〉の光」となったことになる。加えて「とりかへ」の問題が解決し無事に男君へと受け継がれた左大臣家にとっても、この姫君の入内はただでさえ国母を〈家〉から輩出した上、更に天皇家との関係を深めるものであり、こうした一見摂関時代的な権力の再生システムが、「とりかへ」・異性装が原因となって生じた血の繋がらない不義の子によってなされている点に、血脈や実の親子関係以上に〈家〉の繁栄を優先する『今とりかへばや』の姿勢を読み取ることが出来るのではないだろうか。そしてそうした構造を創り上げている『今とりかへばや』の異性装は、結果的には〈家〉のために血の繋がらない子どもを異性装に

よって得た『有明の別れ』と同様に〈家〉の繁栄を目指して機能しているものと考ええる。

五 おわりに

稿者は以前、鈴木弘道氏により指摘されている『今とりかへばや』の親子の〈愛情〉について、各家で何らかの〈家〉の問題と結びついて描かれていたこと、それが左大臣家兄妹の「とりかへ」によって複雑化・表面化し、最終的には〈愛情〉を断ち切り親子を引き離すことによって大団円を迎える構成となっていることに着目し、親子の別離から問題の解消、社会的繁栄までの流れには、〈愛情〉即ち〈個人〉を中心に据えて「めでたし」とする秩序から、社会的地位の獲得、ひいては〈家〉としての繁栄を「めでたし」とする秩序への変化が示されていると論じたことがある¹⁴⁾。今、『今とりかへばや』の「とりかへ」・異性装の問題に関して異性装の系譜上からそのありようを探り、途中見出した物語中の「世づかぬ」性質に着眼して考察を試みた結果、再び〈家〉のキーワードに辿り着いた。はじめに断つたように、『今とりかへばや』の異性装が〈家〉の繁栄に結びつけるために描かれたと考えているわけではない。また、『今とりかへばや』の「とりかへ」・異性装のモチーフや多くの登場人物は旧作の『とりかへばや』から引き継がれたものである点も考慮する必要はあろう。しかし、だからこそ、引き継いだ「とりかへ」や異性装のモチーフが新しい物語の中でどのように機能しているかを確かめることにより、改作のモチベーションや『今とりかへばや』の存在意義を求めていくことが出来るのではないだろうか。そしてまた、そこに採り取られた〈家〉へ意識は、近年見出されはじめてい

る中世王朝物語の〈家の物語〉としての性質に繋がっていく意識だと考える。

(付記) 本文引用及び用例数のカウントに際しては以下のテキストを使用した。

『無名草子』 新編日本古典文学全集40種口芳麻呂・久保木哲夫校注『松浦

宮物語・無名草子』 小学館1989

『古事記』 新編日本古典文学全集1山口佳紀他校注『古事記』 小学館一九九六年

『源氏物語』 新編日本古典文学全集20阿部秋生他校注『源氏物語』 (1) 小学館1994

『堤中納言物語』 新編日本古典文学全集17稲賀敬二校注『落窪物語・堤中納言物語』 小学館2000

『今と리카へばや』 新編日本古典文学全集39三角洋一・日笠敬子校注『住吉物語・と리카へばや物語』 小学館2002

『有明の別れ』 大槻脩『在明の別の研究』 桜楓社1989

注(1) 一二〇〇年頃成立の『無名草子』の中に新旧両作品名が見られ、「ただいま聞こえつる『今と리카へばや』などの、もとにまさりはべるさまよ」と改作を評価している。

(2) 男性装の女君、女性装の男君が存在するために、同性であるはずの人物を異性と思い込み性的感情を抱くことや、逆に、本当は異性であるのに表面上同性同士の関係が成り立つ場合がある。『今と리카へばや』では性の二転三した関係がごく通常の恋や密通の物語に織り込まれて語られるため、こと性愛に関しては複雑な様相を呈す。

(3) 藤岡作太郎氏は『国文学全史—平安朝篇』(一九〇五年)において『今と리카へばや』を「その奇変を好むや、殆ど乱に近づき、醜穢読むに堪

えざるところ少なからず」としている。

(4) 鈴木弘道『平安時代物語の研究』初音書院1960 第三篇第二章「と리카へばや物語に現れた愛情」

(5) 三谷栄一・今井源衛・鑑賞日本古典文学12『堤中納言物語・と리카へばや物語』角川書店1976／桑原博史「と리카へばや物語全訳注」(四)講談社学術文庫1979 など

(6) 河合隼雄「と리카へばや、男と女」新潮社1991

(7) 木村朗子『恋する物語のホモセクシュアリティ』青土社2008

(8) 田中貴子『性愛の日本中世』洋泉社1997

(9) 築田英隆『異性装文学の系譜』(『日本文学』63号1989.12)

(10) 佐伯順子「性の越境—異性装とジェンダー」(井波律子・井上章一編『表現における越境と混淆』国際日本文化研究センター2005.9

(11) 武田佐知子氏は『衣服で読み直す日本史 男装と王権』朝日新聞社1998において、「今と리카へばや」の男女「と리카へ」は、ボーダーレスな男性と女性の理想像、体のラインが見えないゆるやかな衣裳、日本特有の性別未分化の衣服への意識の三要素が揃い可能となっていると説く。

(12) 小嶋菜温子「『世づかぬ』女君たち—葵上・紫上から末摘花へ」(『むらさき』1996.12)／岩田行展「『世づかぬ』『世』からの逃走、『世』との闘争」(『古代文学研究 第二次』14号2005.10) など

(13) 底本は国文学研究資料館蔵初雁文庫本。(新編日本古典文学全集39三角洋一・日笠敬子校注訳『住吉物語・と리카へばや物語』小学館2002)伊達家旧蔵本本の場合「世づか+ (未)」の用例が一例多く、合計三十七例見られる。

(14) 拙稿「『今と리카へばや』の〈家〉への志向—親子間の〈愛情〉描写から—」(『国文目白』50号2012.2)

(15) 西本寮子「『家』の物語の時代」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版2002)